

近代日本の文法学成立期における語の認識

金 銀珠

1 はじめに

語という単位は文法学の根幹に関わる重要な概念である。語が結合し文を作る過程を研究するのが統語論で、語を分解してより小さい単位の構成要素を研究するのが形態論であり、語は統語論と形態論が交差する文法学の中心的なユニットである。このように、語は文法学の中心的な概念であるにも関わらず、今日でも定義不可能と言われることが多い。これは、語の定義に関わる意味、形態、統語的要素の何を重視するかによって語の中身が異なってくるということに起因する。このような語の定義の難しさから、今日の日本語文法学においても語概念を規定しようとする論はほとんど見られないのがその実情である¹。

本稿では、近代日本の文法学成立期において、語という単位がどのように認識されていたのかについて明らかにしようとする。本稿で言う近代文法学成立期とは、明治前期から今日の語の認識に繋がり、現行の学校文法の基礎を築いた大槻文彦文法の『広日本文典・同別記』（1897）が成立する時期までを指す。近代文法を取り上げるのは、近代文法学においては、日本語の文法学を新たに作っていかうとする過程の中で、語の規定は定義可能かどうかに関わらず、避けては通れない必要不可欠なものであったからである。今日の学校文法で行われる品詞分類は近代文法学における大槻文彦文法に基礎を置いているものである。よって、近代日本の文法学成立期における語の認識過程を明らかにすることは、今日の語の認識にも繋がる問題でもあると言える。金（2010）では近代文法学における助動詞の成立について論じる中で、近代文法学の語概念の認識についても少し触れているが、本稿は、金（2010）とは視点を変え、語の認識そのものの成立に焦点を当ててみようとするものである。

以下、第2節で明治前期の文典における語の認識について考察し、第3節で大槻文彦文法における語の認識について考察する。最後の第4節で全体をまとめる。なお、明治前期の文典と大槻文彦文法に分けて考察を行うのは、明治前期の錯綜した状況が大槻文彦の語の認識において一応解決されたと認められるためである。

2 明治前期の文典における語の認識

本節では、まず明治前期の文典における語の認識について考察する。明治前期は江戸期以来の伝統的国語学にのっとり日本語を説明しようとする論と、オランダ語や英語等の西洋文典の方法によって日本語を説明しようとする論が混在していた時期である。語の認識についても西洋文典の品詞分類に倣って日本語の語類を分類しようとする文典と（以下、洋式日本文典と略）、江戸時代以来の伝統的な国語学の語分類を引き継いだ文典（以下、伝統的文典と略）が両立している。以下では、洋式日本文典と伝統的文典に分けて、それぞれの語の認識について考察することにする。以下に考察する資料は、国立国会図書館ホームページ「近代デジタルライブラリー」で閲覧可能なものである。

(1) 明治前期の洋式日本文典における語の認識

本節では、まず明治前期の洋式日本文典における語の認識について考察する。山東(2002)によると、明治四年(1871)までは国学者主導の言語研究が行われたが、その後は近代文学が移入されるまで、洋学者主導の文法研究が行われていたとされる。従って、明治前期は

おおよそ、以下のような洋式日本文典による文法研究が主流であった時期と言える。

（一）で参考にする洋式日本文典は、①田中義廉『小学日本文典』（1875）、②中根淑『日本文典』（1876）、③旗野十一郎『日本詞学入門』（1878）、④藤田惟正・高橋富兄『日本文法問答』（1885）の四冊である。この中、明治前期の代表的な洋式日本文典である①田中義廉『小学日本文典』はオランダ語の文法書を訳した『訳和蘭文語』（大庭雪斎1856）、②中根淑『日本文典』は『英吉利文典』（開成所版1866）をそれぞれ参考にして書かれていることが明らかにされている（古田1959a, b）。『英吉利文典』は大槻文彦の「和蘭字典文典の訳述起原」（1898）において、明治期における英学書として広く一般に用いられ、その影響も非常に大きかったことが述べられている。

まず、洋式日本文典の語の説明について見る。例えば、①田中義廉『小学日本文典』では語は「詞」と呼ばれ、品詞分類の最初の所で、次のように説明している。

夫れ詞は、人の声に発し其志を告ぐるものにして大凡章句を綴り、或は、説話を組成するもの」（巻二、一才）

この記述から「詞」という単位は、音声を持つという形態的な側面、意味を持つという意味的な側面、文や談話の構成要素になるという統語的な側面の三つの方面から考えられている

表 1 洋式日本文典の品詞分類

	①	②	③	④
共通品詞	名詞、代名詞、形容詞、動詞、副詞、接続詞、感詞			
その他の品詞	無し	後詞	無し	後詞
品詞計	7 品詞	8 品詞	7 品詞	8 品詞
助動詞の扱い	動詞の下位一種類			

ことがわかる。ただし、これが実際の語の認識にどのように応用されているかについては品詞分類を見る必要がある。語を一定の基準に従ってグループ分けしていく作業が品詞分類であることから、品詞はまず語であるということが前提になっている。また、当時の品詞論は、語を意味、形態、統語的な側面から具体的に規定するものはほぼ見当たらないため、品詞分類の中で語に対する認識を間接的に読み取っていく作業が必要となる。

まず、①④の資料における品詞分類を上記表1にまとめる。表1を見ると、「名詞、代名詞、形容詞、動詞、副詞、接続詞、感詞(感動詞²⁾」の七品詞は四冊ともに共通して設定されている。洋式日本文典で、品詞を七ないし八品詞に分けるのは、次節で見るとような江戸期以来の伝統的な国語学の立場にはないもので、これは西洋文典に倣っている所である。①田中義廉『小学日本文典』が下敷きにした『訳和蘭文語』では、品詞は実辞(名詞)、性辞(形容詞)、陪辞(名詞修飾語)、数辞(数詞)、代辞(代名詞)、活辞(動詞)、副辞(副詞)、冒辞(前置詞)、接辞(接続

詞)、間辞(感動詞)の十品詞が立てられている。また、②中根淑『日本文典』が下敷きにした『英吉利文典』では、Nouns(名詞)、Verbs(動詞)、Adjectives(形容詞)、Pronouns(代名詞)、Adverbs(副詞)、Prepositions(前置詞)、Conjunctions(接続詞)、Interjections(感嘆詞)の八品詞が立てられている。

品詞の種類を見ると、「A西洋文典」にあり、内容も概略一致する品詞―名詞、代名詞、動詞、副詞、接続詞、感詞」と、「B西洋文典」に似たような品詞があるが、内容が異なるもの―形容詞、後詞、助動詞―の二つのグループに分けることが出来る。ここで、後者のBグループ―形容詞、後詞、助動詞―に注目し、西洋文典と洋式日本文典の語の認識の違いについて考えてみたい。Bグループの中、形容詞については、金(2006)で幕末明治期を経て近代日本の文学における形容詞概念の変遷と成立について詳細に論じられているため、ここでは割愛する。また、助動詞は①く④の資料では独自の品詞としては立てられていないが、語の認識法を考える際に重要な所であるため、後詞と合わせて考察することにする。

まず「後詞」について見る。後詞は、②中根淑『日本文典』、④藤田惟正・高橋富兄『日本文法問答』において品詞として立てられている。「後詞」はいわゆる助詞(や接続助詞等)に相当する品詞で、②中根淑『日本文典』では、次のように説明されている。

後詞ハ名詞および其ノ他ノ詞ニ陪シテ、以種々ノ意味ヲ形ス者ナリ

(下巻、三十才)

②中根淑『日本文典』は前述のように、『英吉利文典』を下敷きにして書かれているものである。②中根淑『日本文典』で立てられた八つの品詞は『英吉利文典』の品詞と一致し、その対応関係から、後詞は *Preposition* の前置詞に当たるものであると考えられる。『英吉利文典』の前置詞の説明は「*Preposition is a word usually placed before nouns.*」[*A preposition shows the connection a noun has with other words in the sentences*] (p.15) と述べられているように、前述の中根淑『日本文典』の「後詞」の説明と類似する。ただ、日本語の助詞、接続助詞等は前置詞とは違い、主に名詞の後に接続するという特徴から「後詞」という名称になつたのではないかと考えられる。

一方、①田中義廉『小学日本文典』、③旗野十一郎『日本詞学入門』のように、助詞類を独立の品詞類に立てないものもある。例えば、①田中義廉『小学日本文典』は前述のように『訳和蘭文語』を下敷きにして書かれたものであるが、『訳和蘭文語』では前置詞に当たる冒辞が立てられている³。元の西洋文典では品詞として立てられているにも関わらずその役割が類似する助詞類を品詞として立てなかったのは、助詞類が「名詞の格変化」の機能を果たすと

考えられていたためである。①田中義廉『小学日本文典』では「名詞の格」という所で、助詞の機能について次のように述べている。

名詞の互に相関係し、或は他の詞に關係するとき、其作動の、又達する知合を、示すものなり、これを格といふ。即ちテニヲハの類にして、独立する詞にならず。

(卷二・八ウ)

このように、助詞は①田中義廉『小学日本文典』では名詞の格關係を表すものであるため、「独立の詞」にはならないとしている。助詞のこのような捉え方は、田中義廉『小学日本文典』が下敷きになっている『訳和蘭文語』で示される名詞の「格」の説明と關係がある。『訳和蘭文語』では名詞の格について、「ナームハルレン」按スルニ名落ルノ義恐クハ事物の名「ガノニヲ」等ノ「テニヲハ」ニ変シ落ルト云義ナラン今前輩ニ從ヒ格ト訳ス」とし、「其關係ヲ見ハス所ノ変勾ヲ其辞尾ニ受ルナリ此変勾ヲ格ト名ク」(前編上卷・二七ウ〜二八オ)と述べている。つまり、オランダ語は名詞が格變化するため、名詞の格變化形の中に日本語の助詞が果たすような役割が説明され、格變化は名詞自身の形態變化の中に収められている。ここから、助詞類を一品詞に立てなかつたのは、オランダ語の名詞の格變化が名詞の形態變化として捉えられるように、日本語の助詞類も名詞の格關係を表す形態變化として考えられたので

はないかと推測される。

テニヲハの助動詞類が独立の詞にならないのは、助詞が名詞に後接する付属形式である点はその理由である可能性も考えられる。しかし、この考え方だと同じく付属形式である日本語の助動詞も独立の詞にはならないはずであるが、助動詞は田中義廉『小学日本文典』で独立の詞として認められている（後述）。従って、日本語の助詞、接続助詞のような形式群をまとめて独立の品詞として立てなかつたのは、付属形式であるということより、蘭学文典の説明に合わせてオランダ語の名詞の格変化形のように日本語の助詞を理解したことがより主要な原因ではないかと考えられる。

次に助動詞の扱い方について見る。助動詞は表1で見ると、すべての資料において動詞の一種として扱われている。動詞の一種には他に「自動詞」「他動詞」等が含まれる。このように、洋式日本文典で助動詞が自動詞、他動詞と同様に動詞という独立の語として認められるのは、元になっている西洋文典の助動詞の扱い方に倣っているものである。助動詞は前述の『訳和蘭文語』や『英吉利文典』のような西洋文典においても、自動詞、他動詞と共に動詞の一種として扱われている。これは、オランダ語や英語の助動詞は動詞に付属した形式ではなく、動詞と同様に時制変化形等を持ち、自立した形式であるためである。また、日本

語の「助動詞」という用語そのものも、蘭学文典の *hulp woorden* (助ける動詞) や英学文典の *auxiliary verbs* (補助する動詞)、*helping verbs* (助ける動詞) という意味を直訳したものであることは、既に金 (2010) でも述べた通りである。

以上の洋式日本文典における品詞分類および助詞、助動詞類の扱い方から、洋式日本文典においては、語とは何かということに対して明確な認識を持っていたというより、西洋文典の分類をそのままか、或いは少し変容させる形で日本語の語の分類にスライドさせている姿が見て取れる。

また、洋式日本文典における助詞、助動詞類の語の認識は西洋文典のそれとは異なるものである。以下では、これらが具体的に西洋文典の語の認識とどのように違うのかについて考えてみたい。西洋文典の語は、まず、分かち書きの単位になるものという前提がある。例えば、『英吉利文典』の例文で、「*I looked at the sun.*」(p.14) の前置詞や冠詞(冠詞は英吉利文典では *Adjectives* の一つとされる) が一つの語として認められるのは、これらが音声的にそれだけで切って言える独立した単位であることによる。品詞は当時、主に「*etymology*」という用語が一般的に使われており、4、『英吉利文典』もその例外ではない。ただし、『英吉利文典』の品詞の説明の部分では、品詞を表す「*parts of speech*」(発話の部分) という用語が所々用い

られている。これは先に述べた語に対する認識の前提―発話上、音声的に切つて言える独立した単位―を示唆するものである。「*I looked at the sun.*」は五つの語が分かち書きによつてそれぞれ独立した単位であることが示されている。語が他の要素と切つて分離して言える独立の単位であることは、語がまず形態的（音声的）に完結し、独立した単位であることを内包している。語の形態的完結性は、前置詞の *at* を *z* で切り、冠詞の *the* を *z* の途中で切つてしまふと、一語にはならないように、形態的に完成しているという語そのものの音声的な完結性である。また、語の形態的独立性とは、例えば、前記英語文の五つの語は他の語との関係から見た時に独立していることを指す。これは、各語を独立してそれだけで言えるということと、*「I looked at the big sun.」* のように *at* と *sun* の間に *the* という別の語が介在出来、*the* と *sun* の間に *big* という別の語が介在出来ることから確認出来る。

一方、洋式日本文典における品詞は、西洋文典における独立した形態的完結性・独立性を持つ「発話の部分」という語の認識を基盤にしているものではない。次の日本語の助動詞および助詞類の振る舞い方を見よう。

(1) 行き―早く―たり (助動詞)

(2) 行き―早く―ば (接続助詞)

(3) 学生―の (助詞)

(4) 学生―一人―の (助詞)

(5) 学生―と―の (助詞)

(1) の助動詞および (2) の接続助詞と動詞の語基との間には「早く」のような別の語を挿入することが出来ない。動詞の語基単独と助動詞・接続助詞の単独では形態的に完結している独立の単位ではなく、動詞の語基と助動詞、接続助詞が接続した「行きたり」「行けば」全体で独立した単位になるため、独立した語をその間に入れることが出来ないのである。この点、助詞は助動詞、接続助詞より独立性が高い。助詞はまず、(3) で見るように接続する形式が「*gakusee*」のように形態的に完結している自立形式につくという点が動詞の語基部という付属形式に接続する助動詞や接続助詞とは異なる。また、(4) で見るように、助詞と名詞との間には、「二人」のような別の語が挿入される場合もあり、(5) で見るように他の自立形式に付属する助詞 (「と」「の」) と名詞の間に介在する場合もある。このような点から助詞は助動詞や接続助詞より独立性が高いことがわかる。ここから、語と助詞、接続助詞、助動詞類の形式の独立性の強さの順番を示すと、次のようになる。

(6) 独立性強 単語―格助詞・終助詞等―助動詞・接続助詞 独立性弱

これを踏まえて洋式日本文典の分類を見ると、前述のように助動詞は①④の資料すべてにおいて動詞の一種の語として扱われている。しかし、日本語の助動詞は発話の部分として独立した形式である西洋文献のそれとは違い(例 I must go)、それ単独では使われない付属形式である。助動詞が一語として認められるのは、洋式日本文典では語が「発話の部分」であるというような前提がなく、英学文献や蘭学文献の助動詞が動詞の一種として扱われているのをそのまま倣っていたためであろうと考えられる。すなわち、洋式日本文典では、語の形態的独立性と完結性については十分な認識はなかったと考えられる。これは、助動詞についても同様のことが言える。助動詞はそれ自身で独立しては用いられないため、助動詞、接続助詞より独立性が強いとしても、名詞や動詞と同じような一語としては認められないのである。

このように、日本語の助詞、接続助詞、助動詞類は西洋語の前置詞や助動詞類とは語の認識が違うものである。しかし、洋式日本文典では、すべての資料において助動詞が動詞の一種の語として扱われ、②中根淑『日本文典』と④藤田惟正・高橋富兄『日本文法問答』では、「後詞」という品詞で助詞、接続助詞も語として扱っている。ここには、語が「発話の部分」であるという西洋文献における語の認識の前提は見られないのである。

以上の洋式日本文典における語の認識を整理すると、①語の意味、形態、統語的性質につ

いての明確な基準があつたというより、②元になっている西洋文典の品詞分類をそのまま日本語のスライドさせており、③語についての西洋文典の基本的な前提―形態的にそれ自身で切つて言える独立した単位―については十分な理解がなかつた、のようにまとめられる。

(2) 明治前期の伝統的文典における語の認識

本節では、江戸時代以来の伝統的な国語学の語分類を引き継いだ伝統的文典における語の認識について考察する。伝統的文典としては、①堀秀成『日本語階梯』(1877)、②物集高見『日本文法問答』(1878)、③佐藤誠実『語学指南』(1879)、④大槻修二『小学日本文典』(1881)の四冊を対象とする。

まず、①～④の文典では動詞の活用が詳しく説明されている点が共通した特徴である。これは、③佐藤誠実『語学指南』で「此ノ書ハ、多ク詞八衢、詞通路、山口栞等ノ諸書ヲ援引セリ」(巻一例言、一オ)と述べているように、伝統的文典が活用を中心に発達した伝統的国語学の研究を受け継いでいるためである。

次に、各資料の品詞分類を整理すると、次の表2のようになる。表2を見ると、語の種類は三つないし四つで、前節で検討した洋式日本文典の七つないし八つの分類とは明らかに違

表2 伝統的文献の品詞分類

①	言、詞、辞
②③	体言、作用言（用言とも）、形状言、辞（助詞とも）
④	名詞、動詞（用言とも）、装詞、テニヲハ（辞とも）

うものである。また、語の分類の基準は、活用の有無が最も重要な要素として働いており（①②③④）、この他、自立形式か付属形式かという点が語の分類の基準になっている場合もある（①）。活用の有無で品詞が分類されるのは、①堀秀成『日本語学階梯』の「言―詞」、②物集高見『日本文法問答』の「体言―作用言、形状言」、③佐藤誠実『語学指南』の「体言―用言」、④大槻修二『小学日本文典』⁵の「名詞―動詞」の分類で、それぞれ、前者が活用が無いもの、後者が活用が有るものという対立関係を見ると明らかである。自立形式か付属形式かという点が基準になっているのは、①堀秀成『日本語学階梯』においてである。①堀秀成『日本語学階梯』では、自立形式の「言」（名詞、副詞等）と「詞」（用言）に対して、付属形式の「辞」（助動詞、助詞、接続助詞等）を別の品詞として立てている。しかし、このような自立形式か付属形式かという基準は、対象とした四つの伝統的文献では例外的である。②③④の資料において、①堀秀成『日本語学階梯』の「辞」に類似する品詞は、資料②の「辞」、資料③の「助詞」、資料④の「テニヲハ」が挙げられる。ここで、②の「辞」には感動詞や疑問詞が、③の「助詞」には副詞が含まれ

ており、助詞や助動詞だけではなく、感動詞、疑問詞、副詞のような自立形式も所属するため、これらが付属形式をまとめた語群とは言えないのである。また、④大槻修二『小学日本文典』の「テニヲハ」には助詞、接続助詞のような活用しない付属形式類が含まれるが、これはこれらが単に付属形式という理由によるのではない⁶。仮に付属形式を「テニヲハ」にまとめているのであれば、助動詞も「テニヲハ」に分類しなければならぬが、助動詞は④大槻修二『小学日本文典』で「脚結言」と呼ばれ、「作用言」（動詞）、「形状言」（形容詞）と共に「動詞」の一種類として扱われている（上巻、三八才）。助動詞が「動詞」の一種類になるのは、活用する形式を「動詞」にまとめており、日本語の助動詞も活用することによる。つまり、④大槻修二『小学日本文典』においても付属形式か自立形式かの区別より、活用の有無という基準がより強く働いているのである。

ここで、伝統的文献における品詞分類は西洋文献における語の分類とは違うものであることに注意したい。ここでは、便宜上、品詞分類という用語を使用しているが、伝統的文献における品詞分類は語を一定の基準によってグループ分けした語の分類ではなく、むしろ現代言語学の用語で言うなら、形態素を一定の基準によって分類した形態素のグループ分けに近いものである。その根拠は、①～④の資料における品詞分類には、名詞、動詞のような自立

形式だけではなく、助詞、接続助詞、助動詞のような付属形式も含まれているという点がまず挙げられる。助詞、接続助詞、助動詞等は、前節で述べたように、西洋文典における語が持つ形態的完結生・独立性を持たない。「私が」「行けば」「食べた」の傍線部のような形式が品詞分類の対象に入るためには、形態的完結生とは異なる見方で、語より小さい意味を持つ単位という考え方が必要となる。形態的完結生より小さい単位の「意味」の方に重点が移行すると、助詞、助動詞等も意味（文法的機能）を持つているため、品詞分類の対象に入ってくることになる。

次の根拠としては、伝統的文典の活用に対する見方が挙げられる。前述のように、伝統的文典は動詞の活用図が詳しく説明される。例えば、四段活動詞の活用の説明を見ると、「住ま―住み―住む―住む―住め」のように変化する活用図が示され（③佐藤誠実『語学指南』巻一、九ウの例）、それに接続する助詞、接続助詞、助動詞等は「(住ま)ば―(住み)き―(住む)まじ―(住む)かな―(住め)ど」のように動詞の活用図の外から追加される別形式として示されている。このように動詞の活用は助詞や助動詞等の前の活用語尾の所で終り、形態的完結性・独立性を持たない「住ま―住み―住め」の形をも活用形として捉えられている。これは活用形が形態的完結性・独立性より「住ま―住み―住む―住め」に共通する同一の意

味を軸にした単位であることを示している。これは、つまり形態素の単位に相通する。形態素は自立形式か付属形式かに関わりなく、意味を持つ単位であればよいのである。「住まば」が一つの単位ではなく、「住ま+ば」の二つの単位で構成されるという認識は語ではなく、形態素のような要素の「意味」のパーツという見方から生まれてくるものである。

また、伝統的文献の②③④の資料において語を四つに分類するのは、江戸期の国語学における富士谷成章『あゆひ抄』(1778)や鈴木胤『言語四種論』(1824)のそれに類似する⁷。富士谷成章『あゆひ抄』では、語を「名」(名詞)、「装」(動詞、形容詞)、「挿頭」(代名詞、副詞、接続詞、感動詞、接頭辞)、「脚結」(助詞、助動詞、接尾辞、活用語尾)の四種に分ける。また、鈴木胤『言語四種論』でも、「体ノ詞」(名詞)、「作用ノ詞」(動詞)、「形状ノ詞」(形容詞)、「テニヲハ」(助詞、助動詞、感動詞、接尾辞、活用語尾)の四種に分ける。このことから、伝統的文献における語の分類が江戸期以来の伝統的な語分類に倣っているものであることがわかる。また、江戸期以来の伝統的な国語学における活用の見方も前述の伝統的文献と同様、活用は活用語尾で止められ、活用語尾に接続する助詞、助動詞等は動詞活用の外側にあるという認識に立っている。伝統的文献の活用認識も江戸期以来の伝統的国語学に倣っているものであると言える。

3 大槻文彦文法における語の認識

洋式日本文典と伝統的文典の品詞分類が混在する明治前期の錯綜した状況に対し、両方の分類法を調和させることで、一応の解決を見出したのが大槻文彦文法の品詞分類である。第1節で述べたように大槻文法の語分類は、現行の学校文法の品詞分類の基礎を築いたものであり、近代文法学への影響も大きい。以下では、大槻文法が明治前期における品詞分類の錯綜した状況をどのように解決し、今日に繋がる語の認識に導いたのかについて考察する。

まず、大槻文法の品詞分類について見る。大槻文彦『広日本文典・同別記』(1897)では品詞を「名詞、動詞、形容詞、助動詞、副詞、接続詞、テニヲハ、感動詞」の八つに分ける。この八品詞は、前節で考察した伝統的国語学の三ないし四つの語分類とは違うもので、洋式日本文典の八品詞分類に類似する。ただし、2(1)節で考察したように、明治前期の洋式日本文典では助動詞は動詞の一種として処理され、単独の品詞としては立てられなかったのが、『広日本文典・同別記』では独立の品詞として立てられている点が違うところである。大槻の「助動詞」は金(2010)でも述べたように、動詞、形容詞、名詞に接続し、活用する付属形式が収められているもので、品詞名そのものは西洋文典に倣っているが、品詞の本身は、

伝統的国語学における活用するテニヲハを盛り込んだものである。

次に、大槻文法が立てた品詞を西洋文典のそれと比較すると、「助動詞」「テニヲハ」「感動詞」の三つの品詞の中身が西洋文典のそれとは異なる。大槻文法の「助動詞」には活用する付属形式が収められ、「テニヲハ」には活用しない付属形式の助詞、接続助詞等が収められている。大槻文法の「助動詞」「テニヲハ」類は、付属形式で形態的完結性・独立性を持たないため、西洋文典の助動詞や前置詞とは語としての性質が違うものである。また、大槻文法の「感動詞」は「人情感動スル所アル」(1897:210)と説明され、「あら」「あな」のような自立形式の例とともに「春の桜か」「取りやかはさむ。」「人のつらきよ」(1897:210-229)の傍線部のような終助詞、間投助詞等も収められている。しかし、西洋文典の感動詞は「hurrah!」「Oh!」(英吉利文典の例)、「helas!」「achi」(訳和蘭文語の例文)のように、発話の部分としてそれ自身独立して言える語類が収められている。しかし、大槻の「感動詞」には、付属形式の終助詞や間投助詞も含まれていることから、洋式日本文典と同様、語が発話の部分として形態的完結性・独立性を持つ単位であるという認識はなかったのだろうと考えられる。大槻文法の「助動詞」「テニヲハ」「感動詞」の品詞名そのものは西洋文典の助動詞、前置詞、感動詞に類似するが、品詞の中身そのものは語の内部の意味を持つ要素を切り取った形態素

のようなもので構成されているのである。つまり、語の認識は前節で考察した伝統的文献の語の認識と同様である。

大槻のこのような語の認識は、大槻が接頭辞、接尾辞類を単語として認めている点を見ると、より明白である。大槻文法では接頭辞、接尾辞類は八品詞の中には入っていないが、八品詞の他にある単語類として品詞分類の後に説明される。大槻は(7)(8)のような助動詞、助詞だけではなく(8)の「か」のような感嘆を表す助詞は大槻文法では「感動詞」に入る、(9)(10)のような接頭辞、接尾辞も「接頭語」「接尾語」とし、単語として認めている(大槻 1897: 235-249)。

(7) 行きたりき (3語) 行き (動詞) + たり (助動詞) + き (助動詞)

(8) 桜か (2語) 桜 (名詞) + か (感動詞)

(9) 素顔 (2語) 素 (接頭語) + 顔 (名詞)

(10) 春めく (2語) 春 (名詞) + めく (接尾語)

大槻の「接頭語」「接尾語」には、(9)(10)の他、「か弱し」「打ち語らふ」「深さ」「大臣だち」の傍線部のような形式等も含まれている。大槻の「接頭語」「接尾語」は自立しては用いられず、必ず他の形式に付属する形式で、語の内部の意味を持つ要素を切り取らなければ単

位として得られないものである。すなわち、これらは形態素の要素として考えられる。

以上考察した大槻文法の語の認識をまとめると、①品詞分類の枠組みそのものは西洋文典に倣い、②品詞分類の基本となる語の認識は伝統的国語学の形態素的な認識を受け継いでいる、のようにまとめられる。

4 まとめ

本稿では、近代日本の文法学成立期を対象として、明治前期の洋式日本文典、伝統的文献における語の認識および、西洋文典と伝統的国語学の成果を折衷させた大槻文彦文法の語の認識について考察した。明治前期の洋式日本文典と伝統的文献の語の認識が錯綜している状況に、大槻文彦は両者を折衷させることで一応の解決策を見出した。それは、品詞分類の枠組みそのものは西洋文典に倣いながら、品詞分類の基本となる語の認識は伝統的認識を受け継ぎ、語の形態的完結性・独立性より語の要素の「意味」を切り出す形態素的な語認識に基礎を置いたものであった。その意味で、大槻の語の認識は「意味」を重視したものであったと言える。大槻の品詞分類は橋本進吉文法を採用した国定教科書の『中等文法』(1943)に引

き継がれ⁸、今日の学校文法の品詞分類に受け継がれている。従って、今日の学校文法の語の認識も意味重視の色彩を色濃く残している。

資料

- 明治前期洋式日本文典と伝統的文典：国立国会図書館ホームページ「近代デジタルライブラリー」
- 大庭雪斎(1856)『訳和蘭文語』：『近世蘭語学資料 和蘭文法書集成』ゆまに書房
- 『英吉利文典』(開成所版 1866)：杉本つとむ編『日本英語文化史資料』八坂書房
- 富士谷成章(1778)『あゆひ抄』：『あゆひ抄新注』桜楓社
- 鈴木胤(1824)『言語四種論』：『言語四種論 雅語音声考・希雅影印』(勉誠社文庫) 勉誠社

注

- 1 近年、言語学の観点から語とは何かについて本質的に論じているものに宮岡(2002)がある。宮岡(2002)では語を「記号面における最小の結節」(p.19)として捉えながら、日本語の語について分析を加えている。この観点は本稿で言う語の形態的完結性・独立性にも通じるものである。
- 2 感詞は、②中根淑『日本文典』では「感動詞」と呼ばれる。
- 3 蘭学文典の『訳和蘭文語』では十品詞が立てられているが、①田中義廉『小学日本文典』では七品詞に減っているのは、『小学日本文典』では『訳和蘭文語』の陪辞(名詞修飾語)が「形容詞」に、数辞(数詞)が「名詞」に統合され、また『訳和蘭文語』の冒辞(前置詞)に当たる品詞が立てら

れていないためである。

4 英語学史の中で、*etymology* という用語は十六〜十九世紀前半までの品詞論を指すもので、特に語形変化と語形成が中心的な内容であったとされる（ヘルムート・グノイス 2003）。

5 ④大槻修二『小学日本文典』の「装詞」とは、接頭辞、副詞、形容詞連体形等のような、名詞や動詞の前でそれらを修飾する形式を指す。

6 ④大槻修二『小学日本文典』では「テニヲハ」を「総べての言葉の下に添ひて其言葉の意を定むる者」で「必言葉と言葉との間に居り上の意を承けて下の言葉に接ぐ者」（下巻、三二才）とし、語と語の間の関係性の表示という文法的機能を重視する立場から「テニヲハ」を規定している。

7 資料①堀秀成『日本語学階梯』の「言」「詞」「辞」という品詞分類とそれに所属する語類は富樫広蔭の『詞玉橋』（1847）の分類に非常に類似し、その影響を受けているのではないかと考えられる。

8 橋本文法では連体詞が立てられ、語の分類の基準も大槻文法とは異なるが、品詞の中身そのものは類似点が多い。

参考文献

大槻文彦（1897）『広日本文典・同別記』（1980 復刻版、勉誠社）

大槻文彦（1898）「和蘭字典文典の訳述起原」『史学雑誌』9-3/9-6

金銀珠（2006）「近代文法学における「形容詞」「連体詞」概念の形成について—Adjective から形容詞・連体詞へ—」『日本語の研究』2-2 日本語学会

金銀珠（2010）「近代日本の文法学における助動詞の成立」『HERSETEC テキスト布置の解釈学的研究と教育』4-2 名古屋大学大学院文学研究科

山東功（2002）『明治前期日本文典の研究』和泉書院

杉本つとむ (1977) 『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅱ—蘭学者による蘭語の学習とその研究—』早稲田大学出版部

杉本つとむ (1991) 『国語学と蘭語学』武蔵野書院

ヘルムート・グノイス (大泉昭夫訳) (2003) 『英語学史を学ぶ人のために』世界思想社

古田東朔 (1959a) 「中根淑『日本文典』の拠ったもの—明治初期洋風文典原点考 2—」『解釈』5-1

古田東朔 (1959b) 「田中義廉『小学日本文典』の拠ったもの—明治初期洋風文典原点考 3—」『解釈』

5-3

宮岡伯人 (2002) 『「語」とは何か—エスキモー語から日本語をみる—』三省堂